世田谷文学館友の会

会 報　第５９号

２０２１年５月２１日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南烏山1-10-10
TEL　03-5374-9111
FAX　03-5374-9120
ホームページ
http://setabuntomo.net/

朗報ひとつ

友の会新会長　平尾　隆弘

三月二十五日、菅野昭正館長のご退任に伴い、御礼のご挨拶に伺いました。友の会初代会長・竹内修司さん、前会長・平出洸さん、引き続き副会長をお願いする堀伸雄さん、そして新しく会長を務めさせていただく私の四人です。当日は「おしらせ１５３号」の発送準備日でもあり、委員や会員ボランティアの皆さんが別室で作業をしておられました。

世田谷文学館の開館は一九九五（平成七）年、友の会の発足は一九九九（平成十一）年。菅野先生は、佐伯彰一館長のあと、十四年近く館長を務められ、その間、蔭に日向に友の会を応援し、支えてくださったと聞いております。また「世田谷文学館ニュース」に毎号掲載される館長対談は、先生の広くかつ深い教養、衰えぬ好奇心があふれていて、いつも楽しみに拝読しておりました。

ここからが嬉しいニュースです。ご挨拶かたがたお話をしていると、菅野先生がおもむろに、「私も友の会の会員にならせてください」とおっしゃるではありませんか。一同「ええーっ」とビックリ仰天。「いやいや、先生なら名誉会員でしょう」「名誉会員ではなく、会費を払って一会員になりたい。手続きはできますか」……別室にいる幾田充代さんに知らせ、幾田さんがさっそく６５０番の会員証を発行、金千五百円也を頂戴した次第です。会計（他の事務も）で苦労の絶えない幾田さんは喜色満面。私なら手が震えるところなのに、テキパキと手続きを済ませられました。

友の会は、世田谷区民に留まらず、文学を愛する全国の会員の皆さまに支えられています。感謝の念に耐えません。近年、会員数は減少の一途をたどっているのですが、案ずるより産むがやすしの気持ちで、いくつかの積極策を講じたく思います。まずは文学館との連携を強化することが最重要。新館長・亀山郁夫先生、花房副館長、スタッフの皆さま、何卒よろしくお願いいたします。当会には名誉館長も加入しておられますので！

辞任の言葉

友の会前会長　平出　洸

この度、会長職を辞任させて頂く事となりました。

長らく自他共に認める万年青年でしたが、流石に八年は長く、精神面、肉体面ともスタミナ切れでこれ以上続行すれば多方面にご迷惑を掛けるのではないかと自覚致し、辞任の決心をした次第です。

思えば浅学菲才の身で大過なく重責を全う出来たのは、友の会会員の皆様と世田谷文学館のご協力の賜と、厚く御礼申し上げます。

幸い、平尾隆弘氏という、この上ない新会長にご就任戴くことになりましたので、今後は微力ながら一会員として新会長にご協力させて戴き、友の会の一層の発展に寄与させて戴く所存ですので、従来通りのご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

顧みますと大変有意義で楽しい仕事であったかと思います。著名な方々を講師にお招きし、控え室でお話し出来た経験は何にも代えがたい思い出です。枚挙に暇ありませんが、例えば香川京子さんの美しい日本語は今も耳に残っています。残念だったのは半藤一利さんと安野光雅さんが最近相次いで逝去されたことです。半藤さんの令夫人は夏目漱石のお孫さんですが、漱石は『それから』では大逆事件に関心を抱いていたのが明白なのに目立った活動をしていない理由を質問したところ、明快に「修善寺の大患」と指摘されました。安野さんは津和野のご出身ですが、「鷗外記念館は駅から遠いのですが自分の記念館は直ぐですから是非いらして下さい」と言われたまま果たせず仕舞いになってしまったことは悔いても余りあります。

唯一の心残りは、全国的に文学を愛する方々がかなり減少しつつある傾向を感じることです。特に会員の皆様にお願いしたいのは、知人や身の回りの方々で文学に興味のある方を積極的に会員に誘って戴くことと、企画委員のメンバーになって戴き会の運営にご協力願いたいことを切望しております。宜しくご検討戴ければと存じます。

長年月に亘るご協力に改めて心より感謝申し上げて、辞任の弁とさせて戴きます。

納戸の本棚 ―ご挨拶に代えて

友の会副会長　堀　伸雄

このたび、引き続き副会長の重責を仰せつかりました。平尾新会長のもと、竹内元会長、平出前会長が築かれてこられた友の会の魅力を更に高めるべく、微力ではございますが、努めてまいる所存です。

私は、終戦間もない小学校一年の頃、愛知県から一家で玉川田園調布にある母親の実家に移り住みました。それが世田谷暮しの第一歩でした。従兄の家族と同居、中学三年まで過ごしました。その後、川崎に転居、大学卒業後、映像音響機器メーカーに就職、数年間、関西に居りましたが、再び世田谷に戻り、今は新町が自宅です。結局、世田谷での生活は延べ五〇年を越えました。

母親の実家はだだっ広い二階建日本家屋で、一階の廊下の脇には六畳間の納戸があり、室内の棚には本が所狭しと並んでいました。「現代日本文学全集」（改造社）、「世界文学全集」（新潮社）、「日本児童文庫」（アルス）などの所謂〝円本〟のほか、表紙が布張りで金箔加工された箱入りの「漱石全集」、坪内逍遥「沙翁全集」や美術全集等々。戦前、内務省に勤務していた祖父が買い揃えていたのです。小学校低学年の頃は、かび臭いその部屋にあまり関心はなかったのですが、児童文庫の中に理科実験の面白さを解説する号を見つけたのを機に、この納戸の本が気になり出し、手当たり次第に読み始めました。納戸の棚は、私の読書の出発点となりました。とりわけ、漱石の初期作品、芥川龍之介の王朝物、土井晩翠、薄田泣菫、北原白秋等の叙情詩、中村白葉訳『罪と罰』、山内義雄訳『モンテ・クリスト伯』などに魅かれました。高校生になると黒澤明の映画にのめり込み、その創作の源流として文学を考えるようになりました。そんなことから文学への関心を抱きつつ、後年「友の会」の存在を知り、十年ほど前から企画委員会の末席に加えさせていただきました。

最近、会報の創刊号（一九九九年七月）を見せていただく機会がありました。文学館の佐伯彰一初代館長が寄せられた祝辞「出発の喜び」が心に残りました。薫風五月に発足した友の会が、世田谷の風土の中で、文学のゆたかな「根」を探り、掘り起こすことに期待するとありました。コロナ禍の霧が晴れることを祈りながら、再びこの期待にお応えすべく、皆さま方とともに歩んでまいりたいと存じます。

追いやられた弱者を支援する行動にも及ぶ。

一九五〇年代の留学中、アルジェリア戦争只中のパリでサルトルらが植民地解放を支援する行動（アラブ人に、文明化の名の下に母国語を禁じ、郊外へと追いやる世論に激しく抵抗）を目の当たりにする。帰国後、在日少年が貧しい環境の中で起こした殺人事件。処刑までの数年間に少年と支援した女性の間で交わされた往復書簡が書籍化され、獄中で成長した彼の言葉に深く共感した。以前から在日という立場の彼らに関心を寄せ、共感はその後の金嬉老裁判支援活動へと繋がる。

講演集は、ヘイト・クライム蔓延る今、アプローチを変えて再度私達に示している。フランス人も驚く程の地道な研究を重ね訳された書籍と共に、青年期の感銘を胸に誠実に生きる人生の証とも思える。

（友の会会員）

わたしの一冊

『余白の声』

文学・サルトル・在日―

鈴木道彦講演集

閏月社

2018年3月刊行

遠藤　雅子

プルースト、サルトルなど仏文学でも難解な作品の研究者である著者の講演集である。

パリの国立図書館に一年間通って調べていた頃、毎日隣席にいる老人。スターリン政権下のロシアで生まれたユダヤ人の彼は、幼い時に家族を殺されフランスに逃れた。成人して社会活動、定年後に自らを振り返り、モスクワ裁判についての執筆を目指していた。後年、著者が再び図書館を訪れると、同じ席で同じように彼が調べ物をしていた。フランス人気質の奥深い『図書館の裏表』。

著者のテーマは仏文学の枠を越え、社会の辺境に

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

・タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
・あなたのお名前、連絡先を明記
・字数は六〇〇字以内（厳守）
・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
・原稿はお返ししません
・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
・原稿は友の会に郵送かＦＡＸでお送りください

シリーズ　世田谷とわたし　第十一回

〝思いが伝わる瞬間〟

大竹　英洋

今でこそ遠く北米の原野に分け入り、野生動物を撮影して作品を発表しているが、小さい頃の自分を知る人ならまったく想像もつかない姿だろう。

世田谷に引っ越して来たのは幼稚園の頃。父は転勤が多く、京都府舞鶴市に生まれた後は広島県呉市に住んでいた。広島訛りで「〜じゃけん！」と話していたら、他の園児から「話し方がへん！」と指摘されて傷ついたのを覚えている。

体が小さく、池尻小学校に入学してからずっと背の順は先頭。「前に習え」と言っても前はおらず、腰に手を当ててぼんやりと宙を見つめていた。放課後グラウンドに集まって保護者が迎えに来る避難訓練では、母は僕を探すより、近くにいるはずの担任を目標にしたらしい。サッカーが好きだったが、活躍したことは一度もない。虫網を手にトンボやチョウやセミを追いかけたけれど、図鑑を離さず標本作成に熱中するほどの昆虫少年でもなかった。

中学校に上がるとき、父が再び転勤になり単身赴任を選択したので区内で引っ越した。だから駒沢中学校に入学しても小学校からの友達が一人もいない。転校生として紹介されるならまだしも、なぜ僕が一人ぼっちなのか誰も理由を知らないまま教室にいるのは辛かった。そんな暗いスタートを切った中学時代は帰宅部で、何かに打ち込むこともなく終わった。

要するにクラスでも目立たない存在だったと言いたいのだが、音楽や図工・美術など、こと表現に関する授業は大の苦手だった。人前で歌う音楽のテストなんて苦痛でしかない。工作は好きだが、絵を褒められたことはなく、下手な作品を教室に貼られるのが恥ずかしくて仕方なかった。

でも、苦手な分野を知れたことは良かったと思う。内面を表現することに自信のないぼくは「ペンは剣よりも強し」という格言に惹かれて、大学ではジャーナリストを目指して学部を選んだ。そしてワンダーフォーゲル部に入部し、この星の美しさに気がつくと、伝えるなら自然だと強く思った。絵は無理だが、今のカメラならシャッターを押せば僕でも写真が撮れる。山行をアルバムにまとめ、それを見ながら仲間と話をするのが楽しかった。

大学三年の夏。自分で計画した夏合宿の参加者に、そこで部をやめて司法試験を目指す後輩がいた。合宿後に作ったアルバムを見せると「一生の宝物ですね」と涙を浮かべてくれた。それが、自分が作ったもので人に感動してもらった最初の体験だったと思う。きちんと写真に取り組もうと思ったのはそれがきっかけだった。

卒業して写真絵本を何冊か出した後、地元出身ということで世田谷文学館に声をかけてもらい、二〇一一年から芦花小学校でワークショップが始まった。講師とは名ばかりで、教えなくとも子どもは写真を撮るのがうまい。僕の役目は、なるべく楽しんで〝自分なりの発見〟をするように促すことだけである。

静かでおとなしい子を見ると、まるで幼い頃の自分を見ているようだ。表現下手でも言いたいことは胸の内にあるはず。技術の向上よりも、自分の思いや発見が人に伝わる瞬間を体験してほしい。それが社会を生きていく上で大きな励みになることを、ぼくは知っているから。

（写真家）

執筆者紹介

一橋大社会学部卒。『そして、ぼくは旅に出た。』（梅棹忠夫・山と探検文学賞）、『ノースウッズ　生命を与える大地』（土門拳賞）他多数。神戸市在住。

ヨソの文学館・記念館

【萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち　前橋文学館】

それにしても朔太郎の字は、朴訥で、実直過ぎる人のような観がある。昨年十二月初め、二度目の前橋文学館訪問の機会を得て、萩原朔太郎の詩稿『漂泊者の歌』の複製版二枚セットを購入した。原稿用紙の色褪せ方も本物そっくりで、左下に小さく「紀伊國屋製」の印字がある。深夜パソコンに疲れ、ふっと部屋の壁に目をやると、それが貼ってあり、対話が始まる。

世田谷区「代田の丘の六十一号鉄塔」は昭和八年頃、朔太郎一家がその真下に居を構えたことで、文学にゆかりのある区の「地域風景資産」に登録された。東京電灯（現東京電力）によって開通したその送電線を北に辿れば前橋がある。朔太郎の心は、鉄塔から鉄塔へまるで風の又三郎のごとくひょいひょいと渡って、前橋と東京を行ったり来たりしていたのかもしれないと思えてならない。

前橋文学館の前を流れる広瀬川は以前と変わらず堂々としている。二〇一四年の訪問の際は市内の「敷島公園」に足を運んで見学した「萩原朔太郎記念館」（生家）が、川を挟んで館の向いに移築されていた（二〇一七年から公開）。昭和二十年の空襲から朔太郎の原稿を守ったという土蔵もある。屋根の上を歩いている猫の人形が可愛らしい。

同文学館の萩原朔美館長は朔太郎の孫である。昨年度、母の生誕百年を記念し「作家　萩原葉子展」を開催。当会にも朔美館長をお招きできればと思う。

住　所　群馬県前橋市千代田町三丁目十二―十
電　話　〇二七―二三五―八〇一一
（友の会会員　幾田充代）

友の会 エッセイクラブ

友の会エッセイクラブは、会員の自発的な願いから、二〇〇六年より活動を続けています。エッセイ創作に興味のある者同士で合評し合い、お互いの向上を目指しています。ここにメンバーのうち三名のエッセイをご紹介します。

さくら舞い散る中、新たな旅立ち

小畑　香野

「さくら　さくら　今、咲き誇る」

今も昔も桜を題材にした歌は数多くありますが、その中でも、私は森山直太朗の「さくら（独唱）」が一番好きです。その歌は、さくらが咲き誇り舞い散る中で友と別れ、お互い新たな未来の道に向かって旅立ち、そしてまたいつの日かここで再び会おう、というような歌詞だと思います。

桜の咲く頃は、ちょうど日本では卒業入学の時でもあり、別れと新たな旅立ちの季節でもあります。私にとっても大きな、と言っては少し大げさですが、一つの新たな旅立ちをしたのも、やはり桜の季節でした。

高校を卒業した後私は一年浪人し、桜咲く、どうにか京都の大学に受かり通うことになりました。私は生まれも育ちも東京で、そのまま東京の大学にいくんだろうなと思っていました。けれども、たまたまその京都の大学が東京で受験できるのを知り、ふと受けてみる気になりました。その受けてみるという心の奥には、東京以外のどこかで一人暮らしをしたい、という想いもあったように思います。

私は一人っ子で、いつも親に依存している、もっと親に頼らず一人でやらなければ、そのためには親と離れて暮らしてみたい、というううっすらとした想いがありました。そんな想いが、京都の大学をふと受けさせたのだと思います。

でも実のところ、その京都の大学は私の第一志望の大学ではなかったので、心の中は少々桜散る思いでしたが、それでも一人暮らしができるという期待を胸にして、京都での大学生活を始めることとなりました。

三月の末に母とともに上洛して、母は入学式が終わると東京に帰って行きました。京都での生活は、風呂無し、台所、トイレ共同の四畳半の下宿で、洋服と布団以外は何もなかったので、一緒に上洛した母とこまごまと用意しました。母はどこからか京都の家具屋街を聞き出して、そこで白いチェストと白いカラーボックスを見つけて買ってきてくれました。今思うと、親に頼らずと思うならば、もう少し自分一人で用意しろよ、もう少し独り立ちしろよ、と当時の自分に喝を入れたくなります。

そしてまた思い出すのは、母が東京に帰るというので、下宿近くのバス停で母を見送った時のことです。母が乗ったバスを見送りながら、なんと寂しかったことか。新たな一人暮らしに期待していたにもかかわらず、胸躍る気持ちは微塵もなく、下宿に帰り四畳半の部屋にポツンと一人で居ることに途方にくれました。

とは言え、それでもお腹は空くもので、夕飯にどうにか作り方を知っている肉じゃがを作りました。肉じゃがは、私の好きな料理の一つでもあります。ただ、私はそれまでずっと、料理などほとんどしたことがありません。どうにか出来上がったものの、その肉じゃがのなんとまずかったことか。これまでの人生で食べた料理の中で、たぶん一番まずい料理だと思います。その味気ない味のない肉じゃがをぽそぽそと食べながら、寂しさが一層つのりました。

京都は桜の名所でもあるので、その当時きっとどこかで桜が咲いていただろうはずですが、私にはほとんど記憶がありません。いや、遠い記憶を手繰り寄せてみると、大学の構内のさくらが舞い散り始めていたような。私の新たな旅立ちを見守ってくれているようだったように思います。

（友の会会員）

ゴミ箱に消えたパンフレット

木下　智子

いつ紛れ込んだのだろうか、そのパンフレットはしばらく私の机の隅に放置されていた。私には不要と思える「介護付き有料老人ホーム」の案内だったが、なんとなく気になって捨てる気にならなかった。「もっと衰えてくれれば、私も今の生活は続けられない。その時、どうしたら？」と、心のどこかに潜む不安の種のせいかもしれなかった。

ある日、見るともなしにそのパンフレットをめくると、みるから品の良い入居中の老婦人が、優しそうな若い介護の女性と談笑している写真が目についた。若い女性が漂わす「温かくお守りしますよ」という雰囲気は、いつまでも「自助自立」に固執している私にも、引き込まれそうな温かさがあった。

そこには、新しい仲間と好きなことを、と記され

ている。日々の生活の他にコーラスや趣味の会など、様々な活動の用意があるという。とりわけの目玉は食事である。高齢者向けに工夫した有名シェフの特製メニューの写真もみるからおいしそう。まるで毎日がホテルのディナーのようだ。

はて？ 私の想像する介護の現場とはえらい違いである。私には、老人ホームとは健康を損ね、不安を抱えた老人が入居するものだという思い込みがある。だが、パンフレットのホームは「楽しいから元気なうちに来てね」、と誘っているのだった。

これ、以前、どこかで見聞きしたような……気がする。

そうそう。夫が仕事からリタイアしたころ、同世代の間で、競って豪華なホームに入るのが流行った。夫は今八五才だから、二〇年くらい前のことだ。

その人たちは功成り遂げ、富裕を誇る人たちばかりだった。札束を切って、ユートピアに入る権利を手に入れた特別な階層、というのが羨望する世間の評価だった。

夫と私の場合、自由に過ごす毎日に満足していたので「団体生活はどうも……ね」とユートピアの生活には夢を抱かなかった。

意外なことだが、そのうち、いつまでもユートピアで優雅に過ごしているはずの富裕な友人たちが、七〇才を超えると、あたかも贅沢三昧のツケを支払うかのように、次々と亡くなっていった。つくづく、お金で「寿命」を買うのは難しいのだという感慨をもった。それ以来、豪華老人ホームが私の頭から消えて今に至る。

今、私が手に取るパンフレットは、まさに、その時の豪華なホームを連想させるものである。さぞかし、このホームも普通の老人には手が届かない高価なものだろう。

ところが、誰もが楽に支払える額というわけではないが、入居金も月々の利用料も昔の豪華老人ホームと比べ格段に安くなっている。過当競争のせいなのか、募集対象は大きく広がり、多少でも余裕のありそうな高齢者に誘いが伸びている。一瞬、我が夫婦もユートピアから誘われているような気になった。

実際のところ、夫も私もリタイア直後の元気いっぱいだった六十代と異なり、大病も経験し、今は明らかに健康の衰えを自覚するようになっている。そろそろ自助自立生活を返上して、何かに依存する気持ちを抱いても不思議ではない。

だが、依存による安心安全生活に、今以上の幸せを見出せるのだろうか。

最近の夫と私の生活を振りかえってみると、確かに、体力の衰えは防ぎようもない現実である、私はそれを何かで補おうと、時短や効率化で家事を改善して、体の負担を軽減させている。このような工夫を重ねることで、私の頭脳はたえず活発に動き、精神も充実しているのがとても快い。また、ベッドでゆっくり休養するのも自由、読書や趣味の時間をたっぷりとるのも自由である。この「自由」の価値は殊の外大きいことにも気付いている。

パンフレットが、質素に営む地味な「シニア自助自立生活」の中に快適さがあると確認させてくれているのだった。それらの思いが一巡した後、ユートピアからの手招きは頭から離れ、パンフレットもゴミ箱の中に消えていった。

（友の会会員）

しめきり

福田　久美子

性分というのか、癖というのか、何事もしめきりが迫らないと腰が上がらないのが私だ。

宿題、特に夏休みの宿題を過大と感じながら、あと一週間で始業式と気付くと走り出す。

やりやすい科目から取り組み、前日遅くに何とか仕上げたものだった。また、試験勉強も山を掛ける様な一夜漬で挑む始末であった。

エッセイも然り。

熟考を重ねて丁寧に書かなくては……と思いつつ、合評、提出期限に間に合う日を逆算して書く日を決める。それも、前日の夜十時頃から筆を執り、一気に書き出す。気付くと、午前二時頃に何とかまとまって、「よし、休もう」と床に入る。

次の日、家事などを適当に片付けてから、書いた原稿にざっと目を通し、誤字や表現に気を配り、清書にかかる。それを必要枚数コピーし、封筒に入れるのを常としている。

もっと余裕を持って書かないから、進歩しないのだと反省はしているのだが……。

実は、そのしめきりにプラスアルファを白状しなければならない。

原稿を送れる状況になるのが、十八時過ぎになってしまう時がある。ポストへの投函リミット十九時に間に合うよう、徒歩三分にもかかわらず、必死の覚悟で自転車に乗るのだ。

ポストの前で郵便屋さんと顔が合い、

「そんなに急がなくても」

と言いながら受け取ってもらったことがある。

「ありがとうございます」
のお礼の言葉に、申し訳ない気持一杯で深く頭を下げた。その人は、大切な物を扱っている威厳を感じさせ、
「本当はいけないのですよ」
と一言発し、集配車をスタートさせた。私は三拝九拝し、車が見えなくなるまで見送った。
その時の自分勝手な振舞を恥じ、「二度とすまい」と固く心に決めた。その片隅では、やっと間に合った（完成した）思いに安堵していた。
ドタバタだが、「しめきり」があるからエッセイが書け、そのお蔭で仲間に加えて頂けているような気持ちが過る。そんな時間が私の人生を豊かにする一端を担ってくれていることに心から感謝している。
（友の会会員）

エッセイクラブは毎月第三木曜日の午後二時より、文学館二階講義室で開催。ご興味のある方々のご参加をお待ちしています。

【会報ご寄稿のお願い】

会員の皆さまの活動のひとつとして、今後もご寄稿文を募りたいと思います。奮ってご投稿ください。
テーマ　：原則、自由。随筆、物語、詩、書籍感想文など。
文字数　：本文８７０字内（会報一段半に相当）。文字数の増減希望はご相談に応じます。
提出方法：ご寄稿の際は、友の会専用携帯電話番号（〇八〇―一一五四―一五六二）に電話をお願いします。

多田智満子と草の背

山田　みさ子

新聞を読み心に残る記事があれば、切り抜いて十年日記に挟む。詩集『長い川のある国』で読売文学賞を受賞した、多田智満子の追悼文もそのうちの一枚である。私は智満子を知らなかったが、文中に掲載された俳句二句に魅せられていた。
時を経て、文章の会の課題が「草」であったとき、ふと閃いたのがその記事。課題文は四百字で、俳句の感想に略歴を加え仕上げた。

《夏痩せやすこし増えたる死の重み》

死の半年前、ホスピスにいた智満子から友人の許に届いた句である。死を詠みながら感傷を全く帯びてはいない。むしろ時空を超えた穏やかな情感さえも感じられる。
そして遺句集『風のかたみ』の最後の句は、

《草の背を乗りつぐ風の行方かな》

であった。
何という伸びやかさであろう。風になった魂は、草原や川辺の草の背を軽やかに乗りつぎ、時には草に憩い時には草を靡かせ、はてさてどこまで参りましょうかと爽やかである。

以来、ほんの折々だが智満子（一九三〇―二〇〇三）の本を読んできた。略歴などでは彼女は詩人のほか翻訳家、評論家、随筆家、フランス文学者と幅広く紹介されている。
少女時代から『平家物語』や『プルターク英雄伝』など古典が好きで、また哲学にも興味を持ち、初めて覚えたラテン語が哲学者スピノザの『永遠の相の下に』だという。
それほどに学術的な深い思考を育てていた彼女だったが、二十歳のとき結核にかかり生死の間をさ迷った。そのことから生と死は自然の循環と観じるようになったらしい。
詩は、『定本多田智満子詩集』（一九九四）に、詩集八冊（他に歌集『水烟』）が収録されている。七百余頁、ハードカバーで厚さ四糎。
二十代の処女詩集『花火』には、すでに死への眼差しは鋭い。なのに冥（くら）くはない。彼女はその卓抜な知性と深い審美眼による詩作で、踊るような自己表現が出来る人だと思った。
語学にも堪能で、夫から結婚前にニューヨーク滞在時の土産で渡された『ハドリアヌス帝の回想』の翻訳では、三島由紀夫に絶賛されたという。ある歌人は、鷗外の『即興詩人』以来の快挙ともいう。
私の友人に、語学を好み今もラテン語を学ぶ人がいる。彼はこの作品を読み、あまりの日本語の美しさに、これはかなりの意訳かと調べたところ、終始原作に忠実であったと舌をまいていた。
最近、〝エッセイの小径〟（白水Uブックス）の『魂の形について』を手にした。薄い新書判だけれど中味は濃い。魂は肉体に内在し心の働きをするが、古来より肉体から離れても存在するとされてきた。遊離魂を見たという人もかなりの割合でいた。現代では、皆そもそも魂ぬきで暮らす状況だから人魂を見たという話題もない。
そうした研究とか学問には向かない曖昧模糊の分野を、智満子はゆったりと博識で考察する。彼女にかかると古今東西の文化も自国の文化のごとく、往

来は自由自在だ。

『古事記』、『更級日記』、『旧約聖書』、ギリシャ神話、インド哲学、イスラム教、仏教経典、中国の古書、孔子、アリストテレス、ニーチェ。

晩年の智満子の随想集『犬隠しの庭』は、若い人たちも対象にという編集者の意図で、新聞や文芸誌などに掲載された数多くの小品の中より気軽に読めるものが選ばれた。

その作品から、神戸の緑豊かな東郊に夫と暮し、子ども二人に孫もいる日常が仄かに見えてくる。庭は犬が充分駆け巡るほどの広さ、樹木も花も豊富。その庭に、宇宙や鳥や昆虫にも詩人の目を注ぐ彼女がいる。

このように人生を充分に生きた達成感と、死は自然の理との受容が《草の背を乗りつぐ風の行方かな》の句に結実していると思う。

彼女は死の二週間前から、水と痛み止めだけにして逝ったそうである。

まるで五穀を絶った即身仏のように。

（友の会会員）

「避難住宅」に住んでいた頃　その２

土屋　春美

あれは確か五月の終わり頃でした。

避難住宅に入った翌日、何もない畳の部屋で私たち一家は、夕ご飯を食べ、近所の人が貸してくれたラジオを聞いていました。

「こんばんは」

玄関の板戸が開いて、戸の向こうに、道を挟んだ隣の家のおばさんが立っていました。

「テレビ見に来ないかい、子供達だけでも連れて行ってもいいかい」

「いいんですか。すいません」

母に促され子供全員で、隣の家に行きました。

玄関を入ると、白髪まじりで坊主頭のおじいさんがにこにこしながら、小学一年の兄と保育所に行っている五歳の私、まだおむつをしている二歳と一歳の弟を茶の間へと招き入れてくれました。

テレビでは、大好きな『チロリン村とくるみの木』が始まったばかりでした。弟たちはさっそくテレビの前に座り、夢中で画面を眺めはじめました。私はといえば、初めてあがった家で落ち着かず、きょろきょろと家の中を見回しました。狭い二間だけの作りは、私の家とおなじようでしたが、ちゃんと茶箪笥もあるしテレビもあるし、ストーブもありました。火事で何もかもなくなった我が家からみたら、お金持ちの家のように私には思えました。

その日から、毎日のようにおばさんや、時にはおじいさんが迎えに来てくれて、テレビを見せてくれました。時々、母が一緒に行くこともありました。

そんな時、母とおばさんが話していた内容で、隣の家の家族構成や、おじいさんが戦争で片腕をなくしたことも知りました。そういえばおじいさんはいつも同じ方の腕で弟たちをかわるがわるにだっこしていました。

おじいさんは、よほど弟たちが可愛かったのか、わざわざ町の写真館で弟たちと写真を撮ってきて、茶箪笥の中に飾っていました。

その年は東京オリンピックを翌年に控えた年だったこともあり、田舎町であっても避難住宅にいても、誰もが活気にあふれていました。私も翌年小学生になるのです。

（友の会会員）

わたしの一冊

『夏への扉』

ロバート・A・ハインライン著

早川書房　刊

坂田　美代子

今度世界で初めて日本で映画化されるという、古いＳＦ小説である。改めて読み返してみると、一九五八年に初翻訳（原作は一九五六年発表）とあるので、私はまだ生まれたばかりだから本当に昔である。

物語は「冷凍睡眠」を中心としたタイム・トラベルものである。舞台は原作発表時の近未来、一九七〇年。

最愛の恋人に裏切られ、大事な発明まで騙し取られた失意の主人公は、冷凍睡眠によって三十一年後に来ることとなる。

この、三十一年後が二〇〇一年であるのがおもしろい。一九五〇年代に考えられた二十一世紀である。第二次世界大戦が終了し、朝鮮戦争後の混乱の時代。

主人公の騙し取られた発明というのは、文化女中器という家事ロボットである。コンピューターはなく、宇宙旅行は一部商業化している。原子力そしてタイプライター……。

そして、主人公は冷凍睡眠とタイムマシンを駆使して裏切られた恋人への復讐を果たすことになるのだが、その相棒となるべき「ピート」がかわいい。ワガママで人見知りで、乱暴で、俺様で。にゃおにゃおと誘われて一緒に夏への扉を開けに行きたくな

る。閉塞した社会を開くどこでもドアである。ドラえもんを見た二一二年の人は果してどう思うのだろうか。

さて、映画化で気になるのは準主役となるこの「ピート」の配役のこと。猫はどのような演技を見せてくれるのだろうか。

猫好きの人にはぜひぜひ読んでほしい本である。

（友の会会員）

世田谷区民ではないけれど……

〝世田谷文学館に魅せられて〟
～神奈川県より～

山田　秀和

よく人から「横浜から二時間もかけて、わざわざ世田谷文学館まで来るね。何か良いことでもあるの？」と言った質問を受けます。自分ではあたりまえの行動をしているだけで、人から不思議がられるのが、むしろ不思議に思っています。一言で言えば知的好奇心が旺盛なのでしょう。

私の故郷は、愛知県小牧市。名古屋市と犬山市との中間にあり、その昔、豊臣秀吉と徳川家康が、干戈を交えた古戦場で有名です。昭和三十年代までは、のんびりとした田園地帯でした。現在は、東名・名神高速道路と中央自動車道の分岐点で内陸倉庫が林立し、様変わりしています。私の学生時代は、気の利いた文教・スポーツ施設もなく、何かあれば名古屋まで出なければならないといった不便さを託っていました。

私は、歴史特に昭和史・日本映画・文学に興味を持っています。文学といっても特定の作家を研究するほどの興味はなく、ごくごく一般常識の範囲内の知識しかありません。ただ日本史、それも昭和史については大いなる関心を持っています。その理由は、小牧市出身の唯一の偉人（？）日本史に名を残す人物、二・二六事件で非業の死を遂げられた渡辺錠太郎大将を尊敬しているからです。大将は、苦学力行の人、正式な学歴は、小学校三年まで。努力に努力を重ねて、陸軍大学校主席（第十七期）、一九三五年、教育総監に就任。天皇機関説容認発言をしたとみなされ、二・二六事件で反乱軍によって殺害されました。

給料の半分を丸善の支払いに向け、西洋の知識の吸収に努められた人物といった話を、小学五年生の時に担任のM先生から聞き、そんな立派な人が小牧から出ているのだと初めて知り、それを端緒に昭和史にのめりこむようになりました。

世田谷文学館及び友の会は、他の文学館にない魅力があります。それは、メニューが豊富であるということです。文学にとどまらず、映画・文学散歩、時にはバスでの旅行もありワクワク、ドキドキすることばかりです。映画に関して特に記憶に残っているのは、三島由紀夫原作の『金閣寺』をもとに映画化した、市川崑監督、市川雷蔵主演の『炎上』です。

いずれにしても文学館も友の会も期待を裏切らない楽しい一時を与えてくれ、これからも足繁く通いたいと思っています。

（友の会会員）

《友の会お誘いのお願い》

皆さまには二〇二一年度会員手続きをいただき、誠にありがとうございました。新会長・平尾隆弘氏を中心に会員同士、共に活動し学び、交流が深められますよう切に願っております。

今後の円滑な活動のためにも、どうぞご友人、知人の方々にも当会へのお誘いのお声掛けをお願いいたします。

入会申込用紙「友の会へのお誘い」は、文学館ロビーにも配置してあります。また、ホームページ「世田谷文学館友の会」からも入会申込みが可能です。

編集後記

今春は周りの自然すべてがひと月早いように進んでいます。散歩の道すがら見出す花々や草木に、「もうこれも、そしてこれも咲いている！」と驚きの声をあげています。自然のサイクルが急速に足を速め怖いようでもあります。

一方、散歩は一つ一つじっくり観察する機会を与えてくれます。花に寄る鳥や虫たちにも関心を向けさせてくれます。丁寧に周りの自然を愛でることの喜びがあります。

散歩はコロナ禍での〝拾い物〟。コロナが収束しても生活の重要な一部にずっと取り入れたいものです。皆さまにとってのコロナ禍での〝拾い物〟は何でしょうか？

（森　ゆり子）